

前回の患者の奥さん六十代であるが、五十肩はともかく、首・肩、更に腰もかなり凝っていた。やや胸満、そしてやや腹満(水毒があり、そこから発生したガスが充満ぎみ)であった。更に胸では水毒に関連すると思われる邪気を感じた。舌は苔で覆われ、胃に停滞した水毒を示している。舌尖の赤みはミゾオチの上、心部の熱を示す。ご主人より反って悪そうな状態であるが、急性症と慢性症の違いがある。ご主人はカゼの熱が関わり急性症であった。

さて、奥さんは一回目の治療後、五十肩がなくなっただけでなく、首・肩の凝りをとても楽になったと驚いていた。

八日後、ご主人が病院で最高血圧 150 で降圧剤が処方された時に買った血圧計で測ったところ、177/92 で、「怖くなった」と来院。腰痛、膝痛、首凝りを訴えた。足は寒え、脈は右が虚弱だが、左はやや強かった。やや上衝している(気が盛んに下から頭に昇り、ノボせている)、やや頭が熱い。がっちりした感じでやや太っている。胸や腹の様子は前回と同様であった。

高血圧には様々な要因がある。だから西洋医学での降圧剤にも種類がある。血管内の血液量を減らす、利尿剤。血管の壁を構成する平滑筋の収縮緊張を抑制するカルシウム拮抗薬。血管は交感神経亢進で緊張するので、交感神経の亢進を抑制する交感神経遮断薬等である。多くの場合、病院では、これが効かなければ、あれをという具合に処方していて、要因を十分判断しているようには見えない。どちらにしろ、高血圧は一つの症状であって、病そのものを示していないということが重要である。

現代西洋医学では病を主に生物学的現象・化学的現象として観て、病名が付けられている。他の病名が付けられない場合の高血圧は、「本

態性高血圧」と名付けられる。つまりはこの場合、西洋医学にとって病の本態が不明だというに過ぎない。東洋医学では、病をからだ全体の問題として観る。観ている現象の次元が違う。からだは生命維持の為に働いていて、病も自然現象に過ぎない。そうした観方の上で、からだ全体を五感で捉えられる現象として観ていく。

東洋医学的に観て、高血圧になる要因の一つとして考えられるのは、生命維持にとって重要な脳への血流の維持である。つまり何らかの理由で脳への血流が悪くなった場合、からだは血流を確保しようと血圧を上げるわけである。だからそれを放っておいて、血圧を下げれば、脳へ血流が悪くなり、悪影響が出る。余りの高血圧は脳出血の危険があり、降圧剤はその予防となるが、それによって血圧が下がっても、本当の問題は解決していない。また、高齢者の場合、血管壁が多少硬くなり、血液を送る力が落ちるから、血圧は高めになって当然だろう。

脳への血流が悪くする理由の一つが首・肩の凝りである。この患者の場合、右の首筋が異常に固まっており、重要な脳への血流を維持する為、右の血流の悪さを補い、左が強くなり高血圧になっていたのではないかと観られた。治療により、右の首筋は不思議な程緩んだ。脈の左右差は無くなり、上衝も無くなった。腰痛・膝痛も問題なくなった。

帰ってから、血圧を測るよう言ったが、三日後に、「怖くて測れなかった」と来院した。その次に来た時には、「最高血圧 152 で安心した」と言う。この患者の場合、脈に左右差が大きかったので、脳卒中の危険がある。病の根幹部分である胸腹に水毒や水毒などがあって、その為に首肩も凝るのであるから、放っておけば、再び血圧が上がるだろう。(2016年1月15日)